

企画展示「文字がつなぐ」 文字・音声ガイド 原稿

◆使い方

0 使い方

企画展示「文字がつなぐ」文字・音声ガイドへようこそ！

番号のボタンを押して、解説と音声をお楽しみください。恐れ入りますが、音声を聞くときは必ずヘッドフォンをご利用ください。音声が不要の方はボリュームをオフにしてご利用ください。なお、ヘッドフォンは売店でお買い求めいただくことができます。

◆展示室前ホール

1 高句麗^{こうくり}広開土王^{こうかいどおう}碑^ひ

4世紀末から5世紀にかけての高句麗^{こうくり}の王、広開土王^{こうかいどおう}の功績を記念して、子供の長寿王が414年に鴨緑江^{おうりょくこう}中流域北岸^{しゅうあん}の集安^{しゅうあん}というところに建てた石碑です。高さが6メートル39センチにもなります。歴博には碑石^{ひせき}発見当時の碑面^{ひめん}や文字の状態を伝える原石拓本^{げんせき}があり、今回、その拓本をプリントして大きさを示してみましたが、天井の高さは6メートルですから、実際の石碑はこれよりもさらに高いこととなります。なお、2012年に広開土王^{こうかいどおう}碑がある集安^{しゅうあん}から広開土王^{こうかいどおう}碑に関連する新たな石碑が発見されています。

◆プロローグ 中国から朝鮮半島、そして日本列島へ—文字の伝来

2 日本列島への文字の伝来

プロローグのコーナーの展示品を御覧ください。

日本列島に文字が渡ってきたのはいつのことでしょうか？朝鮮半島南部^{タホリ}茶戸里^{チャド}の古墳より文字を記すために使った筆と小刀が出土しており、紀元前1世紀には朝鮮半島南部で文字が使われていたと考えられています。日本列島に住んでいる人が文字を書いたということでは2世紀ないし3世紀頃のもの確認されていますが、文字として書いたのか、記号として書いたのかははっきりしません。東国でのその早い例が千葉県流山市^{いちのやみやじり}の市野谷宮尻遺跡^{みやじり}から出土した墨書土器です。古事記と日本書紀によると、応神天皇の時代に百濟^{くだら}より王仁^{わに}が渡来し、『論語』や『千字文^{せんじもん}』をもたらしたとされています。5世紀には銘文を持った刀剣が古墳より出土していますが、それらの製作には渡来人が関わったとの推測がなされています。

◆第1章 文字による支配

3 新羅の石碑

内容がわからなくとも、文字が書かれているだけで圧倒される……文字にはそんな力があります。文字を手に入れた支配者はそれを刀や鏡、そして石に刻んだりしました。

新羅では石碑が多く造られました。ここでは4つの石碑を展示しています。資料1-1は、浦項の中城里碑です。2009年に発見された石碑で、501年に制作された現存最古の新羅の石碑です。財産紛争を調停し、その内容を後世に伝えることが記されています。資料1-2は、迎日の冷水里碑です。1989年に発見された503年の石碑です。前、後、上の3面に銘文があり、やはり財産紛争の調停とその後牛を犠牲として天に捧げる儀式が行われたことが記されています。資料1-3は、蔚珍・鳳坪碑で、524年に立てられた石碑です。新羅が新たに支配下においた旧高句麗の民に対する命令や処罰と、その際に挙行された牛を殺す祭りが記されています。資料1-4は、慶州の南山新城碑第1碑です。591年に新羅の都慶州の南山に山城を築いたときの工事碑で、これまでに断片も含めて10の石碑が発見されています。

このように新羅では数多くの石碑が作られました。日本でもその影響を受けて7世紀後半から8世紀にかけて石碑が作られました。歴博ではその複製を作って「碑の小径」というコーナーに展示していますので、あわせて御覧いただければと思います。

石碑のほか、「権威と王命の伝達」のコーナーでは、日本に伝えられた百済の刀剣や命令が記された木簡なども展示しています。

4 暦を記した木簡

今、私たちは当たり前のように今日が何年何月何日であるかを知っています。しかしそれは誰かが月日の数え方、そしていつから1年が始まるのかなどといったことを決めたから、可能となることです。誰が決めたのか……それは古代の日本列島では天皇でした。「太歳」などといった暦に使われる言葉の類似により、暦は中国から朝鮮半島を経て日本列島にもたらされたと考えられています。資料1-11は、現在日本で確認されている最も古い暦を記した木簡です。689年の元嘉暦と呼ばれる暦で、もともとは四角い板のオモテウラにそれぞれ3月、4月の暦が記されていました。使いやすいように役所で板に書き写したと考えられています。今は小さな丸形をしています。これは暦としての役目を終えた後、板を再利用するときに加工したものです。

5 旅をしてきた古代の鐘

童謡にも歌われるように、お寺の鐘は、人々に時刻を知らせる役割も果たしていました。資料1-14は、1971年に成田市で出土した古代の鐘です。銘文によれば、もとは今の佐賀県佐賀市のあたり、肥前国佐嘉郡ひぜんのくに さかぐんにあったお寺のものでした。

6 太宰府市国分松本遺跡木簡

大勢の人間を支配するためには、まず人間の帳簿を作る必要があります。それを「戸」ごとにまとめたのが戸籍です。「籍」の字はもともとフミタとかフムタと読まれていたようで、はじめは木簡だったのではないかと考えられています。実際、資料1-15は中国の楽浪郡らくろうぐんで用いられていた人口に関する帳簿ですが、板に記されていました。百済くだらや新羅しらぎではまだ戸籍は発見されていませんが、戸籍をもとに記されたと見られる木簡や紙の文書もんじょがあります。『日本書紀』によれば、欽明天皇の代に渡来系氏族のイツという人物によってミヤケの田で働く人々の籍を継続的に更新していく技術が導入されたようです。

九州の大宰府に近い国分松本遺跡こくぶまつもとからは大宝令たいほうりょう以前の戸籍制度を考える上で重要な手がかりとなる、資料1-19の木簡が発見されました。この木簡を日本の戸籍制度の変遷にどのように位置づけていくかが、課題となっています。資料1-20 大宝2年筑前国ちくぜんのくに 嶋郡川辺里戸籍しまぐんかわのべりのや、資料1-21 大宝2年御野国味蜂間郡春部里戸籍みののくに あはちまぐん かすかべりのなど見比べてみてください。

7 額田寺伽藍並条里図

文字は、空間支配にも活用されました。人々に田を分け与える班田制はんてんが行われるようになると、田図でんずや田籍でんせきが作成され、土地に関する様々な記録も作られるようになります。額田寺伽藍並条里図は額田寺というお寺の敷地と周辺の土地を描いた絵図で、8世紀後半に描かれました。現在の奈良県大和郡山市付近やまとこおりやまです。麻布に条里あさぬのの線や道・川・古墳などが記され、大和国印やまとのこくいんがおされています。北側の丘に境界を示す石の柱が描かれています。この石の柱は資料1-25のようなものであったと思われる。現状は大変いたんでいます。もともとは復元複製のように鮮やかに描かれていたと推測されています。

8 印の権威

印はもともと封泥ふうでいとして封をするために中国で用いられ、それが朝鮮半島、そして日本列島にも伝わりました。後漢の光武帝より奴国王に与えられた資料1-29 志賀島の金印しかのしまや、百済より出土した「伏羲將軍之印」も封泥印です。しかしやがて紙によって文書行政もんじょが進められるようになると、紙の上に直接印が捺されるようになり、日本でもその制度が導入されました。た

だし隋唐^{ずいとう}では皇帝の印が紙に捺されることは普通ありませんでしたが、日本では天皇御璽^{ぎよじ}が律令文書行政の中核に置かれました。天皇御璽、太政官^{だいじょうかん}印、国印、郡印という順で印の大きさは小さくなっていきます。資料1-33は八街市^{やちまた}から出土した、8世紀後半の上総国山辺郡^{かずさのくにやまのべぐん}の郡印です。白い紙に赤く捺された公印は強い印象を与え、やがて個人で印を使い出す者も現れました。資料1-34がそれです。印章はそれ自体が権威の象徴でもあったのです。

9 ソンサンサンソン 城山山城と秋田城

「政^{まつりごと}の要は軍事^{ねみ いくさのこと}」とは『日本書紀』天武天皇^{てんむ} 13 年条に見える言葉です。軍事^{ぐんじ}は古代国家において特に重視され、そのために文字による支配が最も具体的に展開される場でもありました。韓国南部、釜山^{プサン}の西に位置する咸安^{ハマン}の城山山城遺跡^{ソンサンサンソン}は6世紀の山城で、『日本書紀』欽明天皇^{きんめい} 22 年条に新羅^{しらぎ}が日本に備えるために城を築いたと記される阿羅波斯山^{あらほし}がこの遺跡を指していると考えられています。資料1-35の、城を築く際に運びこまれた荷札木簡は、古い木簡が多く出土している韓国でも最も古く、日本の木簡に与えた影響という点からも注目されています。また出羽国^{でわのくに}の秋田城^{むつ}は陸奥国^{むつ}の多賀城^{むつ}とともに8世紀に築かれた律令国家の東北経営の拠点であり、かつ渤海^{ぼっかい}との外交の施設の役割も担っていました。資料1-36の、国司^{こくし}であった百濟王三忠^{くだらのくににしさんちゆう}の自署^{うろしがみ}がある漆紙^{もんじよ}文書をはじめ、多くの文字資料が出土しています。

10 あすかいけ 飛鳥池工房と文字資料

飛鳥寺^{あすかでら}の南東に位置する飛鳥池遺跡南地区^{あすかいけ}は、金製品・銀製品^{ふほんせん}や富本銭、ガラス、漆などさまざまな製品を製造していた7世紀後半の工房でした。資料1-45などのように、金属製品を製作する前には木で模型を作り、それに作る数などを記すことがあったことが知られます。資料1-42や1-46などあわせて出土した木簡からは、もともと蘇我^{そが}氏の支配下にあった渡来系氏族の技術者が、645年の乙巳^{いつし}の変の後、飛鳥池工房に組み入れられたことなどが推測されます。彼らは「ヒトの支配」のコーナーで見たように、律令制下では雑戸^{ざつこ}に編成されることとなります。

11 すいとう 出納管理と木簡

モノを管理する上で出納管理^{すいとう}が重要であることは今も昔も変わりません。そしてその技術が渡来系氏族の文筆能力によって支えられていたことは人や土地・生産の管理と同様でした。近年、木簡の出土例増加により、日本列島と朝鮮半島のクラ^{クラ}の管理や出挙制度^{すいこ}の共通性が明らかになりつつあります。資料1-52 扶余^{フヨ}の双北里^{サンブンニ}から出土した木簡によれば、7世紀の百濟^{くだら}においても、役所が利息5割で貸付けをおこなっていたことがわかります。日本の出挙木簡と見比べてみてください。ちなみにキヘンに京都の京と書く字を椋^{クラ}と訓むことがありますが、本来こ

の漢字にクラの意味はありませんでした。高句麗^{こうくわ}でクラの意味で使われるようになり、それが伝わったものと考えられます。

12 正倉院文書^{しょうそういんもんじょ}の帳簿

物事を運営していくためには様々な情報の管理が必要となります。それにあわせて多くの帳簿が作成されました。具体例が正倉院文書の中に多く残っています。資料1-59は写経をした人たちから提出された手実^{しゅじつ}と呼ばれる作業量申告書を貼り継いだものです。これが作業の確認や給料支払いのための基礎帳簿となりました。ただ幕末から明治にかけての時期にその一部が抜き出されて正倉院の外に流出しました。それが資料1-60の手実です。現在見つかっているのはこの3通ですが、その他にも抜き取られたものがあつたかどうかは不明です。

巻物となった帳簿は、すぐに探し出せるように題籤軸^{だいせんじく}が付けられました。韓国からも題籤軸が出土しており、帳簿などに付けられていたと考えられます。また資料1-64では写経する際に使われた「端継^{はしつぎ}」と呼ばれる仮表紙を再利用して帳簿を作成しており、紙の再利用にあたってもいろいろな工夫がなされていたことがうかがえます。

13 文書^{もんじょ}に埋もれて

文書行政^{もんじょ}の発達は、大量の文書記録を発生させる一方で、形式化も生み出しました。資料1-66は、役所で機械的に書類が転写されたために、名前が変えられてしまったという例です。資料1-67は平安時代の戸籍ですが、男性に比べて女性が異常に多く、中央に納税する額を減らすためのごまかしが行われているようです。資料1-68は「返抄^{へんしょう}」と呼ばれる領収書で、税金の納付書のようなものです。様々な作法を覚えるために笏^{しやく}にメモを貼り付けたり、暗記するための語呂合わせの歌が作られたりもしました。

◆第2章 信仰と文字

14 東大寺大仏蓮弁線刻図^{れんべん}

聖武天皇によって造られた東大寺大仏は、華嚴經^{けごんきやう}で宇宙の真理を体現した存在とされる盧舎那仏^{ろしゃなぶつ}です。大仏の台座には蓮弁^{れんべん}一枚ごとに華嚴經の教えに基づく蓮華藏^{れんげぞう}世界が彫り込まれました。上段には如来^{にょらい}と二十二菩薩が描かれ、中段は横線によって無色界^{むしきかい}・色界^{しきかい}・欲界^{よくかい}という三つの世界があらわされ、下段には百億世界を象徴する七つの須弥山^{しゆみせん}が配されています。華嚴經は新羅^{しらぎ}で研究が盛んにおこなわれ、日本ではそれを取り入れて東大寺大仏が造られたのです。

15 仏教伝来

6世紀、百済くだらから仏教が伝えられることにより、日本列島の文字文化は第二の段階に入りました。それは仏舎利ぶつしゃり信仰をともなったものであり、さらに天文・地理・方術・暦など様々な知識技術もあわせて伝来しました。仏舎利信仰については近年、韓国で王興寺ワンフンサなど寺院の発掘調査が進み、銘文が記された舍利容器が発見されています。資料 2-2 『集神州三宝感通録』には、倭人の僧にインドのアショーカ王が世界中に立てさせたという塔が倭にもあるのかどうか尋ねたところ、しばしば古い塔の露盤などが出土すると答えたことが記されています。飛鳥池あすか遺跡からは7世紀後半の経典や寺院に関する資料 2-4 の木簡が出土しました。

16 帛いと文字

資料 2-9 は百済第 25 代の王である武寧王ぶねいおうの墓誌です。武寧王は『日本書紀』にも登場し、筑紫つくしで生まれたと伝えられています。また『続日本紀』によれば、桓武天皇かんむの母親である高野新笠たかののにいがさの先祖であるともされています。その古墳からは、日本列島から持ち込まれたと見られる高野槨こうやまきで作られた木の棺ひつぎが発見されています。王は525年に亡くなりましたが、墓誌のオモテには王の死と埋葬について記され、ウラには墓の範囲を示すとされる図が刻まれています。他にもう1枚墓誌があり、それには王妃の死と埋葬について、また王陵の土地を土地神から購入したことを示す「買地券ばいちけん」が刻まれています。このコーナーでは他に8世紀につくられた元明天皇の墓碑や伊福吉部いほきべの徳足比売とことりひめ骨蔵器こうらい、12世紀高麗の買地券を展示していますが、他のコーナーにも墓誌や骨蔵器を展示しています。あわせてごらんください。

17 庫外正倉院文書

「帳簿ちやうぼの管理」のコーナーでもいくつか御紹介しましたが、現在、正倉院そとの外で保管されている正倉院文書をお目にかけてみます。資料2-14の1・2は手実しゅじつと呼ばれる仕事内容の自己申告書です。前期に展示される王おうの 広麻呂ひろまろ、後期に展示される答他虫麻呂とうたのむしまろともに渡来系氏族です。漢字を美しく書く技術が求められるため、写経生しゃきやうせいの中には渡来系氏族出身者が少なくありませんでした。資料2-17は写経生採用試験にあたって提出された答案です。試字しじと呼ばれるこの答案を書いた村主すぐりのつくり 作まろ 麻呂は、この後あとの写経事業にも名前が見えないので、残念ながら採用にならなかったようです。資料2-14の3・4は請暇解せいけいげ、すなわち休暇願です。現代と同じく休暇をとるときには申請書が必要でした。前期に展示される新羅飯万呂しらぎいまるの請暇解は、よく見ると少し赤い色がついていますが、それは顔料がんりやう などの原料げんりやう となる丹にを包むのに再利用されたためです。

18 さまざまな写経

ここでは奈良時代の写経を御紹介します。資料 2-15 西大寺に伝わる^{こんこうみょう} 金光明 ^{さいしょうおうきょう} 最勝王経 は百済^{くだらとよむし} 豊虫という女性が亡き両親のために写経したものです。資料2-16の1は^{だいほうこうぶつげんきょう} 大方広仏華嚴経で、紫の紙に銀で界線が施され、金泥で書写されています。資料2-16の2は釈迦による三回にわたる説法の様を記したお経で、アノクダツ竜王が登場します。次の「仏教をめぐる交流」のコーナーでも写経を展示していますし、総合展示第1室においても奈良時代の写経を展示していますので、ぜひお立ち寄りください。資料2-19はそのようにして書写されたお経が実際に各地で読まれたことを伝える木簡です。

19 仏教をめぐる交流

近年、古代日本に伝来した^{しらぎきょう} 新羅経 の存在が知られるようになりました。その一つが資料2-20 ^{だいほうこうぶつげんきょう} 大方広仏華嚴経です。紙が白いこと、韓国で発見された新羅経と体裁が似ていることに加え、^{かくひつ} 角筆で新羅語の解説記号が書き込まれていたことが決め手となりました。角筆とはとがった棒で、それを用いて紙をへこませて漢字の読み方などを書き込んでいきます。9世紀に入ると新羅との関係悪化もあって、^{とう} 唐から直接仏典を輸入することが多くなりますが、それも新羅人による貿易活動が大きな役割を果たしていました。^{ぼつかい} 渤海から経典がもたらされることもあったことは、資料2-23 ^{いしやまでら} 石山寺の^{かくれいげんぶつちよう} 加句靈験^{そんしょう} 仏頂尊勝 ^{だらにき} 陀羅尼記によって知られます。空海は渤海からの使いとも深いつきあいがありました。10世紀には渤海・新羅とも滅び、^{こうらい} 高麗が起りますが、引き続き多くの経典が日本に渡ってきました。

20 ^{りゅうおう} 龍王 木簡と九字

文字は人と神仏との対話を取り持つものでもありました。それは^{じゆふ} 呪符、すなわちまじない札によくあらわれています。近年、韓国と日本で共通の信仰内容を示す呪符木簡が発見されています。ここでは龍王信仰と^{くじ} 九字について紹介しましょう。農耕社会では雨が作物の生育に大きな影響を与えます。そのため雨をあやつる力をもつ神と考えられていた龍王への祈りを捧げたのでしょう、「龍王」と書かれた木簡が、^{しらぎ} 新羅でも日本でも出土しています。また九字と呼ばれる横5本、縦4本を組みあわせた記号やそれを省略した井戸の井の字のような記号を記したものが、やはり朝鮮半島や日本で出土しています。もとは中国に由来する信仰ですが、広く東アジアに広まっていたのです。これは古代だけではありませんでした。伊勢志摩地方では、^{あま} 海女が用いるテヌグイに魔除けとして九字を書くことがあり、また高知の民間宗教いざなぎ流で用いられる小刀にも九字が刻まれています。なお、いざなぎ流については、現在、総合展示第4展示室で特集展示「中国・四国地方の荒神信仰ーいざなぎ流・^{ひば} 比婆荒神神楽ー」を開催していますので、あわせて御覧ください。

21 起請札木簡

自分の行いが正しいかどうかを神仏の判定に委ねることは、古くからありましたが、それを文字にして誓約するというやり方が日本列島に出現したのは、今のところ、12世紀前半が最も古いとされています。滋賀県長浜市の神社の遺跡である塩津港遺跡から最大で2メートルを超える起請文を記した木簡が発見されました。そこにはたとえば最初に神仏の名前を列挙し、自分が運送を請け負った荷物をわずかでも失ったら、自分の身体に神仏の罰をこうむってもかまわないといったことが記されています。文字が浮き上がっていることから、実際にある程度の期間、どこかに掲げられていたものと考えられます。

22 竹野王層塔

奈良県明日香村の龍福寺境内にある石塔です。一番下の部分に銘文が刻まれているのですが、風化がはげしいため一部しか判読できません。それによれば751年に竹野王が立てたことがわかります。竹野王は『続日本紀』や長屋王家木簡にもその名が見え、長屋王の近親の女性であったと考えられます。東の面にはインドのアショーカ王が世界中に立てたという石塔についての伝説が記されています。

◆特設 歴博の正倉院文書コロタイプ複製

23 コロタイプ複製

正倉院文書は、中国の敦煌・吐魯番文書とならぶ世界的な文化遺産ですが、それを未来に永く伝え、展示研究にも活用するために、歴博では開設以来、カラーコロタイプ印刷による全巻複製製作に取り組んでいます。通常の網点印刷では原本の再現に限界がありますが、コロタイプ印刷ではゼラチンを塗ったガラス板で原板を作成することにより、原本の色彩の微妙なニュアンスを忠実に再現することができます。また耐久性にすぐれたインキを用いるため、長期保存という点でも他の印刷技術の追随を許さないものとなっています。

◆第1章 文字による支配

24 年中行事障子

9世紀末以来、宮中には一年の行事を表裏に記した衝立障子が置かれています。天皇の側に仕える人々の目に触れさせ、宮中行事への関心を高めるためのものでしょう。展示品は18世紀末、寛政内裏を造営したときに持明院宗時によって書かれたものです。現在の京都御所清涼殿には、1934年に宗時の子孫基揚が書いたものが立てられています。

◆第3章 文字と生活文化

25 書物の伝来

文字を使うことにより、時空を超えて人々に伝えることが可能となりました。書物の誕生が文化の飛躍的發展をもたらしたと言えます。古事記や日本書紀によれば、応神天皇の時代に百済からやってきた王仁によって『論語』と『千字文』が伝来しました。『論語』は言うまでも無く孔子の言行録であり、『千字文』は千の文字を重複することなく四字一句の韻文にしたものです。『千字文』が作られたのは6世紀初めとされていますから、応神天皇の代に伝来したとするのは史実ではありませんが、それにしても、文字文化が百済から伝来したということは、奈良時代の人々にとっての常識でした。『論語』を記した木簡が韓国でも日本でも出土しています。棒の形をした木簡に記されていることには意味があるのでしょうか。朝鮮時代に教育の場で使われた論語の指揮棒も同じような形をしています。なお『千字文』は「漢字を学ぶ」のコーナーで展示しています。

26 宮廷文化の開花

雁鴨池の名で知られる新羅の都慶州の離宮である月池からは新羅の宮廷文化に関わる多彩な遺物が出土し、そのなかには多くの文字資料が含まれています。月池出土の遺物と正倉院宝物のなかに金属製の食器・飲食具・燈火具など、類似のものが見いだされることは以前から注目されています。資料3-6 サハリと呼ばれる銅と錫の合金製の匙は、正倉院では新羅から輸入された状態で未使用のまま伝わっています。月池では宴の場で用いられた一四面体のサイコロが発見されていますが、日本の長屋王邸からは、籤引札とみられる木簡が出土しています。買新羅物解文書は交易のために新羅の使節がもたらした品々に対して貴族たちから提出された購入希望申請書で、反故紙となった後、鳥毛立女屏風の下貼などとして用いられたために伝来しました。

27 和歌を書いた木簡

木簡に和歌を書いたものがあります。従来は万葉仮名の練習と見ていましたが、最近、典礼の席でうたうためにつくられたのではないかという説が唱えられています。普通の二倍の長さ、二尺の木簡に、一字一音式の万葉仮名で、和歌を一首、一行に書くという特別な形式にあてはまるものがいくつかあるからです。そのなかから三首の声を再現してみました。言葉を古代の子音、母音の音色で発音し、アクセントを再現して言葉の意味を保ちながら抑揚を付けました。節回しは平安時代の今様と中世の謡曲を参考にしています。

28 古今和歌集仮名序所引なにはつのうた

難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花 咲くや木の花

木簡に書かれた和歌の半数以上が「難波津の歌」です。土器にこの歌を書いたものも多く、習う人が多かったことがわかります。お祝いのときよくうたわれていたのでしょう。「さくやこのはな」を繰り返すのは、お祝いに集まった人が代わるがわるうたった古い形式をあらわしています。

29 万葉集巻16-3807番歌

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

滋賀県宮町遺跡から出土した木簡は、おもてに「難波津の歌」うらに「浅香山の歌」が書かれています。古今和歌集の序文に「うたのちちはは」と書かれている二首です。平安時代に和歌をならうときは、この二つのうたからはじめました。そういう習慣が紫香楽宮の時代にできていたのかもしれませんが。

30 万葉集巻10-2205番歌

秋萩の下葉紅葉ぬあらたまの月の経ぬれば風をいたみかも

京都府馬場南遺跡から出土した木簡は、この和歌のはじめと同じ言葉が書かれています。秋の景色をうたった和歌ですが、仏教の行事の席でうたわれた可能性があります。この遺跡は、たくさんの灯りを仏に供える供養を何度も行った跡があり、土器に墨で「歌一首」「黄葉」などと書いたものも出土しています。

31 下田東 遺跡木簡

奈良県香芝市の下田東遺跡は古墳時代から室町時代まで一貫して有力者の拠点でした。この遺跡から出土した曲物の底板に記されたメモ書きは、大和の有力者の多角的な活動を物語っています。一面には稲の品種と種蒔きの日程を記し、そのあとに、伊福部豊足という人物の馬の進上に関する上申書の下書きが記されています。稲の品種については資料3-19から21の種子札を御参照ください。ウラ面には稲刈りのことや、鮎をとって売ったことなどが記されています。この他、このコーナーでは十干十二支を書いた木簡や九九算の表、それにアイヌが用いた暦なども展示しています。

◆第4章 文字を使いこなす

32 漢字を学ぶ

漢字は行政運営に必要なものでしたから、朝鮮半島でも日本でも役人たちは漢字の書き方と読み方を熱心に学びました。資料4-6の木簡のように、手習いされた漢字や言葉のなかに官職や位のことが見えるのはそのためでしょう。漢字の読み方は、漢字の音を覚えるのと、漢字の意味にあたる朝鮮半島や日本の言葉をあてて覚えるのと、二つの方法があります。漢字の読み方を学んだ跡を伝える古代の資料は、朝鮮半島にはこれまでほとんどありませんでしたが、近年、仏典を新羅語で読みくだったものが知られるようになり、今後の解明が期待されています。

33 漢字で表す

中国周辺の諸民族や国家では、漢字と漢文の学習がある程度すすむと、自分たちの言語と文化にあわせて改造を施しました。朝鮮半島と日本列島は近いので共通するところが多くありました。まず、資料4-9 新羅・慶州の月池から出土した木簡に見えるように、漢字の音読みを借りて自分の国の言葉を書き表しました。また、カネヘンに益と書く字を鑑にあてて使いました。資料4-17や18を御覧ください。この字は中国では重さを表していた字です。文章の切れ目に決まった字を置く例としては資料4-15 西河原森ノ内遺跡手紙木簡があります。これも朝鮮半島の漢文の影響を受けたものでした。

万葉集には文字の遊びもあります。たとえば資料4-21では、「二、八十一」の「八十一」を「くく」とよませて「憎く」と読ませたり、助詞の「かも」に鳥の「鴨」の字をあてたりしています。「かも」の例は資料4-19にも見えます。

34 様々な漢字の書体

資料 4-23 『古今文字讀』とは雑書体と呼ばれる様々な書体 21 種を紹介した本です。空海が唐で入手して日本に持帰り、嵯峨天皇に献上したもので、長らくその写本の存在は知られていませんでしたが、近年、調査がなされ、広く紹介されるようになりました。おそらくはこの書の影響を受けて空海は益田池碑銘などの書を記したと考えられます。資料4-24は歌人として名高い藤原定家が記したものです。定家は 40 代より読みやすさを心がけてのちに「定家様」と呼ばれることになる独特の書体で記すようになります。後世、冷泉家当主は定家様を用いるようになりました。資料4-25は文字をデザインに用いた江戸時代の小袖屏風、資料4-27は朝鮮時代に描かれた文字絵です。文字絵は屏風仕立てにして子供部屋に置かれました。

35 国字ではなかった「畺」の字

漢字は組みあわせることによってさらに新しい漢字を創ることができます。そのような漢字のうち、日本で作られた漢字のことを「国字」と言いますが、古代朝鮮半島の文字資料が増えるにしたがい、今まで「国字」と思われていたものがそうではなく、朝鮮半島で生まれたものがあることがわかってきました。たとえば資料4-35の百済木簡に見える白に田と書く「畺」の字です。

36 木簡のカタチと素材

ここまで展示を御覧になっていただいて、木簡にも様々なカタチがあることがおわかりいただけたでしょうか？木簡の材料とした木の種類に目を向けると、朝鮮半島ではマツが圧倒的に多いのに対し、日本では藤原宮や平城宮で出土する木簡はほとんどヒノキ、ついでスギという具合です。ところが同じ日本でも地方で出土する木簡の場合は手近に手に入る木ですませたようで、ヒノキやスギに限らず様々な木が木簡にされています。樹種の調査はまだ最近本格的に進められるようになったばかりなので、今後、調査が進むにしたがい、また新たな発見があるかもしれません。

◆第5章 それぞれの道

37 漢字文化の新段階

8世紀初めの大宝律令制定、そして約30年ぶりの遣唐使派遣再開は、文字文化にも大きな変化を与えました。それまでよく見られた「前に白す」形式の木簡は朝鮮半島の影響を受けたものでしたが、8世紀には下火になります。書風という点でも、半島経由で伝来した六朝風の書体から唐風の書体へと変化していきました。それは「どのように書くか」を自覚的に考え始めた、「書風」そのものの発見でもありました。これまでのコーナーも含めて、7世紀の書体と8世紀の書体を見比べてみてください。

38 かなと印刷

9世紀以降における日本の文字文化の大きな変化として、ひらがなの誕生があります。最近、平安京よりかなが書かれた9世紀後半の墨書土器が出土し、注目を浴びています。やがて『古今和歌集』仮名序に象徴されるように、平安文化にとってひらがなは欠かせないものとなっていきました。なかには鞞手と呼ばれる、文字を絵の中に描き込む手法も生まれます。

これに対して、朝鮮半島の文字文化を象徴するものとして印刷が挙げられます。中国とともに高麗・朝鮮では木版印刷が盛んに行われました。なかでも11世紀初めに高麗で印刷された大蔵経は、日本にも大量に輸入され、東アジア世界に大きな影響を与えます。また11世紀半ばには中国で活字が発明されましたが、その後、13世紀には高麗で金属活字が造られたとの記録が残されており、12世紀と伝えられる銅活字が出土したりもしています。朝鮮の活字は、やがて日本にもたらされ、古活字版が生まれることになりました。

●特設 中世の木簡—高麗船水中発掘

39 高麗船水中発掘

韓国では近年、水中発掘が盛んに進められ、朝鮮半島西側の海域より12世紀から13世紀にかけての船が発掘されています。2007年以降、4隻の船から189点の木簡が出土しており、そのうち100点は竹で作られています。いずれも荷札です。泰安船は青磁のみですが、馬島1号船から3号船にはサバや蟹、アワビなど様々な食料品や加工品が見られます。イガイとみられる「虫ヘンに炎と書く字」やイノシシとみられる「ケモノヘンだけの字」など、朝鮮半島独自の漢字も使用されています。韓国で味噌や醤油を作る材料となる味噌玉麴も登場します。胡麻油や蜂蜜は高価な青磁に入れられており、中央の役人への贈り物ではないかと見られます。

◆エピローグ 文字文化交流の担い手

40 新羅僧元暁 と日本

近年の出土文字資料の増加によって、日本列島で作られたと見られる木簡が朝鮮半島で発見されるなど、両地域の具体的な交流のあり方が明らかになりつつあります。

また日本に伝来した新羅華嚴宗の高僧元暁の著作『判比量論』は光明皇后の蔵書であったことで知られていますが、これに新羅語による書き入れがなされていたことが明らかとなり、日本の漢文訓読や片仮名の起源が新羅に求められる可能性が高まってきました。元暁の子薛聡は新羅語による漢文訓読の方法を考案したとされていますが、その子仲業は779年に新羅使の一員として来日します。この時、日本の文人淡海三船は元暁の孫に会えたことを喜び、仲業を歓待します。おそらく二人は筆談によってコミュニケーションを交わしたのではないのでしょうか。漢文が東アジア世界に果たした役割がうかがえます。

(了)